

2、ざわざわの虫

信号機の前をつきつて、島の東の目印、タコのもニュメントの赤い頭を見おろせる坂道をのぼる。寺を横切って、一つ目の交差点にさしかかる。

「がんばって！」

ショウちゃんが声をかける。ハルばあに、ぼくらに。交差点のむこう側にスーパー植松の看板が見えてくる。唇をかみしめて、文句の言葉を飲みこむ。

今は一刻をあらそう緊急事態だ。ぼくら島の子は、こういうときに協力することを、家でも学校でも強くいいかされている。島は内地とはちがうと。

島では人も物もかぎられている。この人をきらいだとか好きだとか、仲がわるいだとかいいだとか、そんなことをいってられないときがある。でも、「チクショウ」

コウジがつぶやいた。

「なんで、こんな目にあわないといけないんだよ」

それは、ぼくが飲みこんだ言葉とおなじだった。

ちょうど、植松のドアがあいて、アイスを手にもった低学年たちがでてくる。植松のおばちゃんに助けを求めることは、ショウちゃんの頭にはないようだ。

走る走る。ショウちゃんは運動がにがてなのに、必死に走っている。それに、ショウちゃんは、ハルばあに背中にしがみつかれている。一番たいへんだろうに文句をいわない。

ぼくは植松から、視線をそらした。

「今どき人力だなんて」

コウジも口では文句をいっても抱えている足をはなさない。足一本でも、十分に重たい。

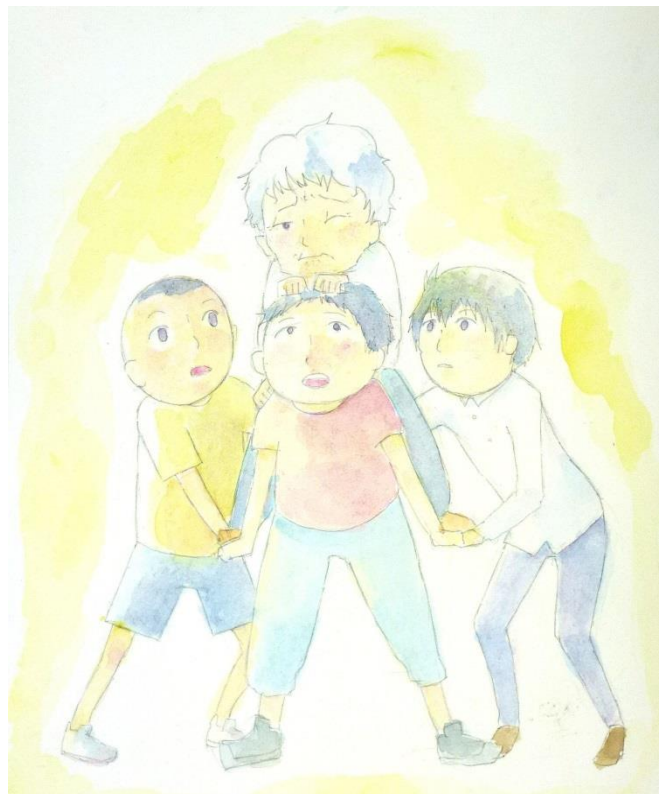
「こんなとき、内地では救急車をよべばいい。すぐに、病院へはこんでもらえる。タクシーだってうじゃうじゃ走っている。そもそもみんな車をもっている」

ぼくはだまっていた。

コウジはおくれることが大きらいだ。人に時間に、はやり時代。小学校の授業でも予習のさらに予習をするから、三十ページくらいさきをいっている。

ぼくはといえば、遅刻の常習犯だ。はやりの菓子は食いたいけれど、服はスカートでなければなんでもいい。勉強は予習どころか宿題だけでせいっぱいだ。

「だいたい、赤の他人だ。都会じ



「あ、知らない人が道にたおれていてもしらんぷりするらしいぜ」

「コウジ！」

ぼくはコウジをにらみつけた。

いくらなんでも、いいすぎだ。確かにハルばあは他人だけど、おなじ島人、知らない人ではない。それに、人がたおれているのにしらんぷりなんておかしい。

「テレビできいたデマだろう？」

「インターネットの記事で見た。田中んちのパソコンで、都会のはやりっていう連載を読んでるの」

コウジはひきさがらない。

「はやりがそんなにだいじかよ」

田中くんはぼくと同級生でもあり、家は民宿を営んでいる。インターネットに宿の宣伝をのせていて、コウジはパソコン目当てによく田中くんちへ遊びに行く。

いつもおしゃべりなハルばあは、痛みをこらえているせいかしずかだ。ショウちゃんは息をするのでせいっぱいだ。ようやく、二つ目の交差点が見えてきた。

「おまえ、田中んちにかよいだして、なんかへんになってる。このあいだも、いきなりケータイがほしいなんていいだして。誕生日でもないのに、ルール違反だろう？」

台所で天ぷらをあげている母ちゃんに、コウジが携帯電話をせがんでいるところを見てしまったのだ。ぼくの家ではほしい物があっても、誕生日以外、おねだりはなしというルールがある。

しかも、誕生日プレゼントでも、五千円以上の物はダメだ。母ちゃんは、うちにそんな余裕はありませんと、コウジを相手にしなかった。ふんっ、いいきみだ。

「ショウちゃんと連絡とるのも、電話なんてかけるよりも、ひとつ走りした方がはやいじゃないか！」

弟との口ゲンカ。ぼくは押ししているつもりだった。

二つ目の交差点の横に診療所の白い外壁が現れた。ハルばあが砂浜でひっくりかえってからまだ十分もたっていない。ぼくはのこりの力をふりしぼる。

と、コウジがくすくす笑いだした。

「ケータイでぺちゃくちゃおしゃべりする趣味はない。ネットがしたいだけだよ。ケータイがあれば、わざわざ田中んちへいかななくてもすむだろう」

コウジは笑いつづける。

「もしかして、オニーチャン、ケータイの使い道は電話だけだと思っていたの？」

頭の中で、石と石がぶつかりあったような、かちんという音がした。コウジはぼくのことを、オニーチャンだなんてよばない。ちょっと前までは、オニイとよんでいた。

それがいつのまにか、おいっとか、なあとか投げやりなよび方にかわっていた。双子でおない歳だからしかたないのかもしれないけれど、なんかいらする。

「そんなに都会がよければ、でていけよ！」

ハルはあの足を抱えていなければ、弟にとびかかっていたところだ。パンチがわりのらんぼうな言葉をあびせる。少しは効いたにちがいない。ところが、

「もちろんさ」

コウジはすまして答えた。あまりにもあっけなく同意されて、ぼくはハルはあの足をはなしそうになった。

「スケっち、もうちょっとしっかり支えて」

ごめんと、ショウちゃんにぼんやりあやまる。

「ファッション系の高校に通いたいんだ。島からは通えないから合格したら、岩崎のおばちゃんの家から通う」

はっ、高校？ なにをいっているんだ。ぼくらはまだ小学六年生だ。次は中学だろう？ 日間賀島には高校がないから、進学と同時にでていく子もいるけれど。

コウジが日間賀島をでていく。いつか、ぼくも？ 今いちぴーんとこないのに、とうめいな羽虫の大群を吸いこんだみたいに、胸のおくがざわざわした。

診療所のとびらはあけっぱなしになっている。ショウちゃんは死にそうな声で叫んだ。

「せんせ、沼田先生、たすけてくれえ！」

「ほーい！ 今いくよー」

緊張感のかけらもない返事が、裏庭から返ってきた。

ぬまじいは日間賀島でたった一つの診療所ではたらきたった一人の医者だ。

ひょろっこくて白髪頭にまるメガネをかけて、よれよれの白衣を着ている。見かけはたよりなさがだが、待合室の壁には洗濯物みたいに、ずらっと表彰状が飾られている。

その待合室に先客はない。主に診療所がにぎわうのは、観光客の多い夏休みの時期だ。砂浜で足の指を切ったり、自転車でころんだり、ほとんどが軽傷の患者さんたちだ。

「おお、ハルさんや、どうしなすった？」

ぬまじいは、あけっぱなしの裏口から入ってきた。剪定バサミを手にしているところを見ると、このクソ暑い中、庭の松の木でもいじっていたみたいだ。

「ふう、砂浜で、ふう、ネコ車をおしているときに、ふう、ころんだんです、ふうふう……」

ぼくがぼうっとしているものだから、ショウちゃんが息つぎのあいまに説明する。

「あ、足を痛がっていた」

あわてて、ぼくもつけくわえる。

「ほぼ死にかけているよ」

コウジが口をはさむと、

「まーだ、生きとるわい」

それまでだまっていたハルはあが、くわっと閉じていた目玉を見ひらいた。

「わしはまだ死ぬわけにゃあいかん。やることあるでよ。そのためにゃ、ぜにっこかせがな。おおいたた」

「やることって、なに？」

なんとなくきになった。すると、

「夢……」

ぼそりと、ハルばあはつぶやいた。コウジが首をかしげる。

「やっぱり重症だぜ。ある意味、死にかけているな。こりゃあ、岩に頭をうちつけたせいだ」

「頭を？」

コウジの言葉に、ぬまじいの顔色がかわった。白いカーテンをめくって診察台をたたいた。

「こっちに運んでおくれ」

「いーち、にの、さん！」

ぼくらはタイミングをあわせて、診察台のふちにハルばあをおろした。ハルばあは礼もいわずに自分でころんところごって、ぼくらに背中をむけてしまった。

「ごくろうじゃったなあ。待合室の麦茶を飲んでいきなさい。氷はいつものところにあるよ」

ぬまじいは部屋の冷蔵庫を指さした。病人用の氷が入っているのだが、ぼくらはたまにごちそうになる。

「ありがとうございます」

ショウちゃんは頭をさげる。

ぼくは待合室にもどって、巨大なせんぷう機をつけた。ほぼ死にかけているのは、ぼくらの方だ。体中の水分が蒸発して、つばを飲むとのが痛い。

「夕立でもきそうだ……」

コウジは窓わくによりかかっている。丘の上の診療所から、海を見わたせる。そのさきに内地も見える。近頃、コウジは海をながめていることが多い。

「なにをしったかぶりが」

ぼくの声、ショウちゃんの声がかきけした。

「二人とも、おまたせ！」

紙コップを三つ抱えて、ショウちゃんももどってきた。今日は氷が少なめだ。

「おばあちゃんの足を冷やすのに使うだろうから、氷をもらうのは少しだけにしておいたよ」

もはやため息もでない。

ぼくはでかいヤカンをもちあげて、紙コップに麦茶をついだ。生ぬるい麦茶に、氷のおもてがゆるゆる溶ける。しかたなく、コウジのコップにもついでやる。

ヤカンを手にもったまま、いっきに麦茶を飲み干す。うまい。氷で冷えるまもなく麦茶はなくなる。もう一杯もう一杯。ようやく冷たさを感じるようになる。

「ふう、生きかえったよ」

思わず、息をついていた。ショウちゃんもおなじように一息ついて、診察

室に目をやった。

「ハルばあの足、骨が折れてないといいけど。歳をとると治りにくいってきいたことがある」

「いいや、一本くらい折れていた方がいい。そうすれば、しばらくおいかけられないですむ」

コウジの意見に、そうだと賛成しそうになって、ぼくはのどのおくに四杯目の麦茶を流しこんだ。水分で腹がたぷたぷになったところで、カチワリ氷にかじりつく。

せまい待合室に、がりがりという氷をかじる音だけがひびく。やけに、診察室はしずかだ。中で、どんな治療をしているのかな。体が生きかえると、ふと疑問がわいてきた。

「ハルばあの夢って、なんだろう？」

「うん、きになるね。さきだつものがあるから、あの歳で、ネコ車をおして商売をしているんだろうね」

ショウちゃんはごうかいに氷をかみくだいた。せんぷう機の風にのり、氷のかけらがとんでくる。

「はっ？ さきだつものってなに？」

ぼくが首をかしげると、コウジは鼻で笑った。そのくせ、なにも答えてくれない。

「ああ、お金のことだよ」

ショウちゃんは、おじいさんおばあさんと同居しているので、たまにききなれない言葉を使う。

「金かあ……」

なんだか口にふくんだ氷が、きゅうに冷たくなってきたきがした。金がないと、かなえられない夢。もしかして、すべての夢は金がないとかなえられないのか？

「ったく、はためいわくなはなしだぜ。ばあさんの夢よりも自分の夢の方が、よっぽどだいじだ」

コウジは飴玉みたいに口の中で氷をころがしている。

コウジの夢は、美容師になることだ。保育園のころからずっと変わらない。ダサイ父ちゃんの姿を見て、ああゆうふうにはなりたくないとは決心したらしい。

ぼくの夢はといえば……、

「スケッチの夢は、野球選手になることだよね」

ショウちゃんは氷をたいらげて、ぼくにむきなおる。

「んっ、ああ」

コウジの前では、ふれてほしくない話題だ。いつものようにテレビで野球を見ながら夕飯を食べていたとき、父ちゃんとの会話に口をはさまれたのだ。

「ぜんぜん現実的じゃないな」

コウジは真顔だった。くやしくても、いい返せなかった。

確かに、日間賀島で本格的な野球はできない。小学校には野球部はないし、自主的に作ろうにも人数がきびしい。一学年一クラス約二十人しかいない。そのうち約半分は女の子だ。

野球の好きな子たちは、放課後にあつまって、プラスチックのバットとゴムボールで遊ぶ。ぼくにとっては、父ちゃんとするキャッチボールの方が、まだちゃんとした練習だ。

「それじゃあ、早めに島をでないといけないね」

「は、はあ？」

ぼくは頭がこんらんした。

ショウちゃんまで、いったいなにをいいたすんだ。さらに、ショウちゃんはつづけた。

「おれは、最近、トラックの運転手になるのもいいなあって思ってるんだ。ほら、いろんな土地にいけるだろう？」

「い、いろんな土地って……」

ぼくはますますこんらんした。

「プロ野球選手みたいにたくさんお金をかせげないけれど、トラックの運転手なら、知らない土地にいけるじゃん」

夢をかたるショウちゃんは、きらきらしている。なんとなく、ぼくは目をそらす。

「知らない土地で、知らない風景を見て、食べたことのないうまいものを食べる！」

「へえ、カッコいいじゃんか」

コウジはショウちゃんを見直したように声をはずませた。

「けっきょく、食いもんかよ」

そうはいったものの、ぼくはうまく笑えなかった。

「スケッチ、将来うん億円とかかせぐようになったら、山盛りの鶏のからあげをおごってくれよ」

「い、いいけど」

あいまいにうなずくと、コウジはそっぽをむいた。

以前、コウジは小学校の作文に書いた。

夢でかんたんに金をかせげるほど、世の中は甘くない。でも、夢で金をかせげるようになったら、とてもしあわせなことだから、がんばろうと思うと。

そもそも、ぼくは金をかせぐことを真剣に考えたことはない。野球選手にあこがれているのは、テレビの中の青いユニホームの選手たちがカッコよく見えたから。

おかしなチンモクが流れている。と、診察室のドアがあいて、ぬまじいがでてきた。

「みんな、給水はすんだか？ すまないけれど、日が暮れるまえにもうひとつ走りたのめるか？」

ぼくらはリヤカーをひいている。荷台の中には、ハルばあが入っている。毛布にくるまれて足を固定しているのに、痛み止めが効いてきたせいかうるさい。

「わしは内地の病院にゃあいかん！」

「ハルさん、かんねんするんじゃな」

リヤカーの後方から、黄ばんだ白衣姿のぬまじいもひょこひょこ歩いてついてくる。

「ここからだせえ、ださねえか！ だれかあたすけてちょー、人さらいだぎゃあ！」

むかっているのは、東港のそばのぼくのじいちゃんの家だ。じいちゃんは七十代の今でも現役の漁師をしていて、漁船を一隻もっている。船の名前は、太陽丸だ。

「ハルさん、ユージローさんに電話で連絡しておいたから。内地の病院まで、船で運んでもらいなさい」

「いらんせわだ」

ユージローとは、ぼくのじいちゃんのあだ名だ。ほんとうの名前は勇一郎なのだが、昔の映画にでていた俳優さんに顔がにていることから、古い知り合いは、そうよんでいる。

ぎょろ目のじいちゃんの顔を、ぼくはかっこいいとは思わないけれど、じいちゃんは女の人にもてたらしい。ちなみに、同じぎょろ目のぼくより、切れ長の目のコウジの方がもてる。

「おろせえ、おろせえ！」

ハルばあはわめきちらす。みんなでかついで、リヤカーの荷台にのせるときにも大暴れした。

「ほんとうに元気だねえ」

ショウちゃんは、ホッとしたようにいう。

「こんな元気な病人、見たことないんだけど」

あきれて言葉がつつかない。

「いっそ、あの海の底にしずめちまいたいぜ」

コウジはまた、海をながめている。道の先に見える海に、ちょうど太陽がしずんでいく。

ぼくは赤茶色にさびついたリヤカーのバーに体重をかける。ぎいぎいきしんだ音を立て、リヤカーのタイヤは前に進む。今、何時だろう。めちゃくちゃ腹がへってきた。

ああ、家にかえりたいなあ。かえって、母ちゃんのあげた天ぷらを食べたい。煮魚じゃないといいな。米の上にのせて、ぱりぱり食いたい。想像すると、ごおっと腹が鳴った。

「わしは家にかえる、家にかえりてえにゃあ」

きゅうに、ハルばあの声に力がなくなった。なんだか、かわいそうになって、後ろをふりむいた。すると、ハルばあの右手がすばやくうごいた。

なにかが空をとんでくる……、

「いてっ！」

足もとに、落花生のからがころがった。

「ナイスコントロール！」

コウジが吹きだす。

ぼくはまんまとハルばあの演技にだまされて、額に落花生のからをぶつけられたのだ。

「スケッチ笑わせないで」

こらえきれないというふうに、ショウちゃんも吹きだす。例によって、ショウちゃんは笑いだすと止まらない。めずらしく、コウジもくつつくと笑い

つづけている。

「全然おもしろくない！」

またしても、ぼくだけのけものにされているようだ。

「ハルさん、ユージローさんとデートだと思えばいい。ユーさんはもてるから、これをのがすと次はないじゃろ」

「なにがデートじゃ……」

ハルばあはあの声が小さくなった。

しばらくのあいだ、ハルばあはもの思いにふけっていた。なにを考えているのだろうか？ 今度は警戒しながら後ろを見ると、ぎろりとにらまれた。

「検査なんて、必要にゃあわ！ わしはぴんぴんしとるがね。こりゃあ、こわっぱども止まれえ！」

ハルばあはもんぺのポケットに手をつっこみ、あるだけの落花生を投げだした。

「もったいない、豆が入ってる」

ショウちゃんは、足もとにおちた実入りの落花生をふまないようによけた。コウジの頭にも、いくつか落花生が当たった。いいきみだと思ったのに痛がらない。

コン、コツーン！

「痛い、痛いって！ もう……」

いがぐり頭のぼくの頭に、実入りの落花生が当たるといい音がある。ぼくだけ……、もはや、かなしくなってきた。とんでもなく長い一日だ。

「岩に頭をうちつけたんじゃ。ねんのために、検査をしておきなさい。足の骨も複雑骨折しているかもしれんぞ。今は痛み止めの注射が効いているだけじゃ」

ぬまじいはなだめるのを止めておどかしだした。

「晩には、赤くぱんぱんにはれるじゃろうな。正座して写経もできんようになるかものう」

「そ、そいつはこまる」

やっと、ハルばあが大人しくなった。

「おばあちゃんも、写経してるんだね。お経を一文字ずつ紙にうつすなんてすごいね。おれ、となりで見ていただけで、目がしばしばしてくるもん」

ショウちゃんのばあちゃんも、写経をしているみたいだ。ハルばあはだまっていた。

「ここから、くだり坂になるよ」

いちおう声をかける。

日間賀島の民家はしお風から家をまもるために、まんなかによりあつまって建っている。大きな車はとおれないので、島人の足はもっぱら自転車か原付バイクだ。

診療所から、じいちゃんの家まで舗装されてない細道だ。くだり坂ではリヤカーをひくのではなく、スピードがすぎないようにブレーキをかけなくてはいけない。

ショウちゃんの息があがる。ひくよりも支える方がよっぽどたいへんだ。じいちゃんの家はもうすぐだ。さすがに、ぼくの膝もがくがくしてきた。と、

いきなり、

「わしがケガしたのは、あんたらのせいだがね。あんたらが逃げなんたら、わしはこけなんだもん」

念仏をとるような低い声で、ハルばあがいちゃもんをつけてきた。

「ネコ車のタイヤもパンクして、パーになってもうた。商品も砂にまみれて、わやになってもうた」

いい返さないのは、歯を食いしばっているせいだけじゃない。もはや怒る力がのこってないのだ。そんなぼくらに、ハルばあはしんじられないことをいってのけた。

「べんしょうしてもらおうでな！」

はっ、ベンショウ？ って、金を払えということ？ なんて、ぼくらが払わないといけないの？ 疑問すら声にできない。今はとにかく目的地へつきたい。

ショウちゃんは顔をまっ赤にして全力をだしている。コウジはちゃんと左側のリヤカーのバーを支えているのかな。右側だけが、やけに重いように感じる。

ようやく、道路が平らになった。漁港には、白に青いラインの入ったたくさんさんの船がならんでいる。じいちゃんの漁船も、家からすぐの港につないである。

「おお、ユーさんすまんのう！」

ぬまじいが手をふる。

「ああ、すぐに出航できるぞ！」

海に面した木造の民家の前に、黒く日焼けしたじいちゃんが立っている。じいちゃんは両手をふりかえすと、ダッシュで太陽丸にエンジンをかけにいった。

ハルばあを船にかつぎこむため、じいちゃんの漁師なかまがあつまっている。風呂敷包みをかかえたばあちゃんもいる。包みの中身は、ハルばあへの差し入れだろう。

「ついたあ」

「おわった」

「家にかえろうぜ」

やっと最悪な一日とおさらばだ。

さいごの力をふりしぼって、リヤカーのバーをそっと地面におろす。バーの外へころがりである。背中をそらすと、顔面にどかーんと夕日がぶつかってきた。と、突然、

「ほれ！」

目の前に、こぎたない巾着が突きだされた。

「わしが商売できねえあいだ、きんちゃくひとつ、ぜにっこでいっばいにしろ。やくそくしたで！」

「ちょっ」

ぼくがおしかえすまもなく、ハルばあは漁師たちの手で、じいちゃんの漁船へはこびこまれた。船は水しぶきをあげて、夕日のむこうへ吸いこまれていく。

「やれやれ。ハルさんはほんきで焼けおちた小料理屋を建て直そうとしているようじゃのう」

ぬまじいはぼくの肩をぽんっとたたいた。

「ハルばあの小料理屋？」

ぼくはぬまじいの顔を見あげた。

ショウちゃんはへにゃへにゃと道路にしゃがみこんだ。コウジは電信柱にもたれている。

「あれはもう四十年くらい前になるかのう。ハルさんは火事で多くをなくした。開店したばかりの自分の店も。小料理屋をひらいてくれた、旦那の正治もなあ」

はじめてきくはなしだった。ぼくは指先でつまんでいた巾着袋を手の中にもちなおした。

「火事があったんだ……」

ショウちゃんをつぶやいた。

ぬまじいによると、火事のあと、のこされたハルばあは女手一つで二人の子どもを育てた。今では、二人とも結婚して内地で暮らしているそうだ。

ハルばあは子どもとの同居をこぼんで、日間賀島からでようとしなない。夢のために商いをやめない。ふと、疑問に思った。どうして日間賀島にこだわるのだろうか？

「あの火事の晩、正治は燃えさかる家にとびこんだんじゃよ。たんすの引き出しに札束を入れてあったそうじゃ。二人の子どもを内地の学校にやるためのなあ」

ぬまじいは目を閉じた。

「バカなやつじゃ。紙の札だと燃えてしまうからな。だからといって、死んだらもともこもない。それから、ハルさんは硬貨をあつめるようになったんじゃよ」

ぼくは巾着を見つめた。

土色の巾着は、もとは黄土色だったのだろうか？ 穴があいた箇所には小さな布を重ねて、ていねいに縫いあわせてある。ハルばあのだいじな巾着。

こぎたないだなんて思って、なんだか、わるいことをしたような気持ちになった。それに、ぬまじいとぼくのじいちゃんと火事で亡くなったという正治さん。

子どもの頃は、ぼくとショウちゃんとコウジみたいに、三人で遊んでいたのかな。考えごとをしていると、ぬまじいはとんでもないことをさらりとたのんだ。

「さあて、そろそろ帰るとするかのう。すまないが、リヤカーを診療所にもどしておいてくれないか？」